

## 原著論文

## 保育者養成教育における実習前保育体験のあり方について

A Study of Practical Educational System for  
Early Childhood Teacher and Childcare Worker

目良 秋子 (白百合女子大学)

Akiko Mera (Shirayuri University)

わが国の保育者養成における実習教育期間が中国やニュージーランドなどの諸外国に比べ短いこと、また新任保育者の早期離職の問題、学生の保育者基礎力の養成を求める現場からの期待などといったさまざまな保育者養成にかかわる課題に対する取り組みとして体験的実習・活動があげられる。それぞれ置かれた現状を生かした他校の体験的実習・活動を取り上げながら、本学の保育体験のあり方について考察した。保育者養成は養成段階だけで完結するものではなく、カリキュラム上の工夫や学内外の連携のもと、体験的実習・活動から実習、そして現職者の保育の専門性の成長へと連続的・段階的に構築され、よりよい養育教育のあり方が望まれる。

## はじめに

今、日本の保育・幼児教育は大きな変化の中にある。保育士の待遇や保育士不足、待機児童の増加、支援を必要とする子どもや家庭の増加等、保育所にかかわる課題は社会問題化した。また、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂の時期を控え、子どもたちの保育・教育をどのように行っていくのかを現場とともに保育者養成校においても十分に理解し、時代の要請に応えることができる保育者を養成・教育する必要がある。そうした、多くの解決すべき課題を含んだ現代の保育・幼児教育の課題を保育者養成という立場から、とりわけ実習前の保育者養成教育のあり方について考えてみたい。

## 子どもの実態・現場感覚を知る機会

現代の日本は世界でも類を見ないほどの少子高齢化時代を迎えている。家庭の子どもの出生順位別出生数の推移を見ると、きょうだい数が減少傾向にあり<sup>1)</sup>、きょうだい一人いる家庭が4割、一人っ子の家庭が4割となっている<sup>2)</sup>。いとこの人数も減少傾向にあり、自分よりも年齢が幼い子どもと過ごす経験が今の子どもたちは少なくなっている。保育者を目指し養成校に入学してくる学生も、子どもとかかわる経験があまりない。

一方、保育現場では保育所、幼稚園問わず保育者不足の傾向にあり、全国の保育士の有効求人倍率は平成28年12月で2.67倍となり、今後も高くなることが予測されている<sup>3)</sup>。保育の量拡大に伴う必要保育士数と離職率を考慮した推計保育士供給数の差は約7.4万人との厚生労働省の報告がある<sup>4)</sup>。こうした人材不足の状

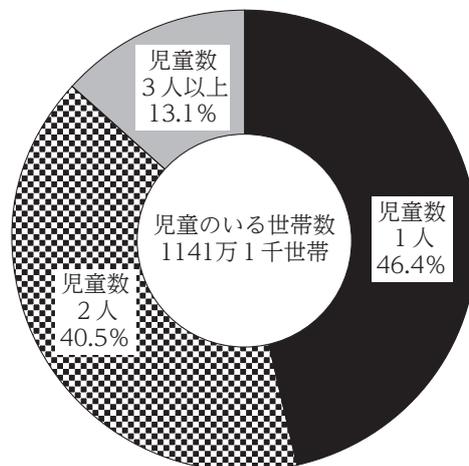


図1. 児童のいる世帯の児童数 (平成26年)

況が続くなかで、現場での十分なトレーニングを受けることなく就職するとすぐに担任を持つ場合も出てきている。保育者の早期退職の問題が指摘されて久しいが、これは給与や待遇面の問題、職場の人間関係の問題だけではなく、子どもの実態把握をする機会が少ないなか、いきなり責任のある仕事に就くことも一つの要因になっていると考えられる（図2）<sup>4)</sup>。

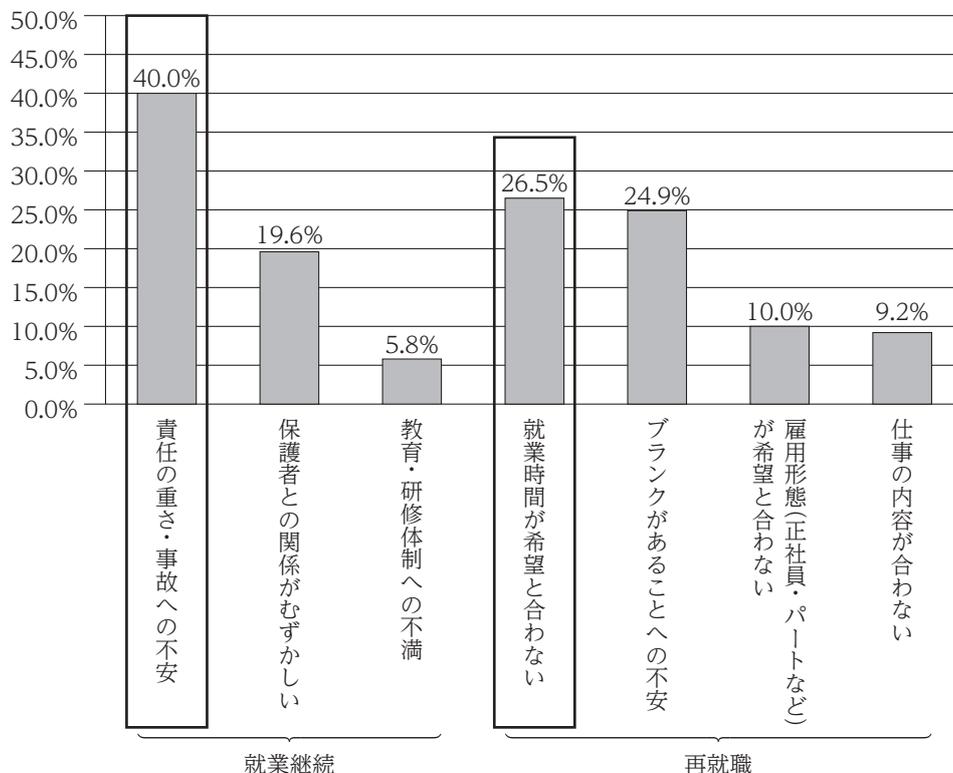


図2. 保育士資格取得者の保育士としての就業を希望しない理由（複数回答）（平成28年 厚生労働省）

今の日本の保育者養成課程における現場実習時間は、諸外国の現場での実習時間数と比較するとより少ない。日本の場合、多くの学生が幼稚園教諭免許状と保育士資格を取得するが、おおむね幼稚園での教育実習4週間、保育所2週間と児童福祉施設2週間および保育所もしくは児童福祉施設で2週間と計10週間の現場実習となっている。しかし、中国の場合、2011年10月教育部より公布された「幼稚園教師養成課程」では、養成の3制度に共通して養成年限は18週の「教育実践」（教育実践と体験：教育実践を見学する経歴と体験を持つこと；教育実践に参加する経歴と体験を持つこと；教育実践を研究する経歴と体験を持つこと）を基準に規定している<sup>5)</sup>。ニュージーランドでは、実際に教職につくためには、教員審議会への登録が必要で、大学などの高等教育機関で所定の資格を取得した者が教育現場において週12.5時間以上、2年以上の現場経験を積むことが教員登録として求められている<sup>6)</sup>。そして、その他の国々においても、実習指導教員という立場の者が現場と養成校と連携しながら実習生の指導にあたっており、日本の見切り発車的な保育者養成と比較すると、子どもの保育の担い手をより時間をかけて丁寧に育てている。我が国においては、子どもとかかわる経験が少ないうえに、本実習時間も少なく、就職するとすぐに“先生”として期待される現状を鑑みると、本実習以前に子どもの実態や現場感覚を知ることが必要であると考えられる。

### 実習前の体験的実習

このように諸外国と比較すると現場での実習経験が少ないこと、また保育現場からの学生や養成教育への期待などから、保育学生が子どもの具体的なイメージを持ち保育者の仕事理解をすることができるように本実習前に、様々な取り組みを国内の各養成校では行っている。特に保育現場における「プレ実習」、 「保育所観察実

習」などといった体験的実習・活動の取り組みを行っている養成校が増えている。

全国保育士養成施設協議会専門委員会調査によると、保育実習に先立つ体験的実習を6割以上の養成校で実施されていることを明らかにしており、養成校での指導だけでは難しい点について、実際に保育現場に赴く体験的実習が補完的な役割を担っていると指摘している<sup>7)</sup>。本実習に先立つ体験的実習の実施時期は、入学後の早い時期から実施されており、2年制養成校の9割、4年制養成校の半数が1年次から実施している<sup>8)</sup>。定員別に実施の有無を見ると、定員50人未満の養成校では8割、50～100人未満で7割、100人以上になると5割強にとどまり、定員が多くなると体験的実習先の確保の難しさもあり、実施が難しくなっているという。実施形態は、科目として位置づけているものや、ボランティアや出前保育として地域貢献の中で実施しているものなど多様である。また、体験内容としては、「見学」・「観察」が約87%、「参加」が約39%であった。体験的実習後の振り返りは、記録や感想を求める養成校が半数あるが、まずは保育現場で見学・観察・参加することそのものに重きをおいているという。また、複数の仲間と同じ保育施設で体験することで、ひとりで本実習に臨むことの予行演習の機会になっていると指摘している。そして、何より実習評価を問われない体験的実習では、学生たちが評価を気にせずのびのびと子どもたちと触れ合うことができ、保育施設側も実習生を引き受けるのは異なり、責任感や構えなく学生たちを見ていただけのではないだろうか。

また、同調査では体験的実習から複数の本実習と実習教育の連続性や階層性の担保、学生の自己成長感の保障について養成校教員へのインタビューにより明らかにしている。その中でポイントとなることについて、“連携”と“カリキュラムの工夫”があげられている。連携のあり方については学内連携と学外連携がある。学内レベルでは、実習委員会等において学生や実習指導方法などについての情報交換、スケジュール調整などが図られる。また、実習担当者とそれ以外の教員との連携では、「実習関連授業科目だけで実習指導を行おうとしない」姿勢があること、そのためには教員一人ひとりの実践や現場感覚を担当授業内容と繋げていくだけのスキルの高さや柔軟性、教員間の協力体制があることで実現可能となる。学外連携のあり方については、実習先だけではなく、地域や養成校間の情報交換や学生交流という形もある。

しかし、こうした学内連携・学外連携をしていくためには、カリキュラム上の工夫が必要となるだろう。保育士養成課程では、2011年より保育実習における事前事後指導を充実させ実習による学びを強化させるよう選択必修科目の保育実習Ⅱ又はⅢにも保育実習指導Ⅱ又はⅢが加えられるようカリキュラムが改正された。これを受けて、保育士養成校では実習指導の授業時間を増加したが、一方で保育実習を行う時期は、2年制では第2学年の期間内、3年制以上では第3学年以降の期間内と定められているため、それ以前に実習を経験させることができないことから、特に2年制の養成校では体験的実習や活動を盛り込むためには各養成校内での時間割調整などカリキュラム上の工夫が必要となる。しかし、学生が保育者の資格や免許を取得し、保育者として働き続けていくことができるようにするためには、養成段階からいねいな積み重ねを行うこと、そして現場へ繋ぐことが現代の保育者養成に求められていると考え、タイトなカリキュラムではあるが体験的実習や活動を可能とする模索をする必要があるだろう。

現代の保育者養成校教員においては、入学者確保に向けての業務、学生生活指導、キャリア支援、特色ある活動・行事等多岐にわたる業務を担うことも多く、時間の確保が難しい。しかし、体験的実習や活動を行うにあたりどのような点を重視して実施するかを各養成校で明確にしたうえで実行することは可能ではないかと考える。以下、それぞれの置かれた環境や条件を活用している養成校の体験的実習や活動を紹介し、本学の保育体験について見ていくこととする。

## 他校の工夫と本学の保育体験

### ○東京都内 K 女子大学（定員数：150人）

地域の子育て支援活動としてキャンパス内でひろば活動を展開しているが、その活動に教員、助手、大学院生、希望学生がグループごとでかかわっている。綿密な実施計画を立案し、実践、振り返りもていねいに行っている。実習に出る前の学生が子どものイメージや子どもとかわる様子を先輩のやり方を観察しながら実践

する機会が作られている。また、1年に一度、同様の活動を行っている養成校がいくつか集まり報告会を学生主体で行い、情報交換をしながら刺激を受け、意欲を高めている。この活動自体は地域の子育て支援であるが、その活動にうまく学生の体験的学修の機会をリンクさせている工夫がある。また、保育者養成課程の置かれた学科の教員だけでなく他学科の専門性を持つ教員（食物栄養、建築・デザイン）の協力を得ながら学生が環境整備や活動内容の考案をしており、大学内の連携、地域との連携がとれた活動のなかで学生たちは実践的体験が可能となっている。

#### ○東京都内K大学（定員数：100人）

1年次、2年次の前期・後期に「保育の現場を知る」という科目として、現場と連携した授業を展開している。大学と隣接する幼稚園や大学近隣の保育所、各種施設で、1、2年次の各学期、計4回体験学習が実施されている。各学期、実習関連科目教員とそれ以外の教員がチームを組み、体験学習の場となる園や施設の特徴に合わせた事前指導を実施している。園や施設には学生がグループで出向き、振り返りもグループで行った後全体報告を行っている。この計4回の体験学習を通して、学生は園や施設の雰囲気や環境、教職員の役割を知ることができ、その流れで各種の本実習に臨むことができるシステムになっている。体験学習日はあらかじめ実習同様に学事歴に組み入れられている。

#### ○神奈川県S短期大学（定員数：100人）

保育者養成初期段階における保育現場の具体的なイメージ形成のための取り組みとして、「保育方法論」という授業を1年次実習前に展開している。そのなかで短大と同じ敷地内にある併設保育園において、学生は子どもたちとふれあいながら保育環境との関連で子ども理解を深めている。学生たちはグループでクラスに入り、体験後グループごとで子どもの遊びや活動場所の環境図をマップ化し、そこでどのような遊びや子ども同士、子どもと保育者、子どもと学生といったかかわりが見られたかなどを付箋に書き記し、マップに貼っていく。そのマップを手がかりとしてグループから全体の振り返りを行っている。

#### ○本学の保育体験

本学では、1年次後期から2年次後期にかけて大学近隣の保育所において保育体験を実施している。学生はグループに分かれて、各学期を通して大学近隣の一つの同じ園に月1度の頻度で訪問する。時間帯は、大学の時間割では4、5時間目にあたるところで、園としては午睡明けの保育時間から降園前となる。配属クラスは園の都合にもよるが、0歳から5歳のクラスまで経験することが可能な場合もある。保育体験では、“まずは保育現場の空気を感じて来る”ことが目的となっている。しかし、体験をそのままにしておくのではなく、感じたことをレポートとしてまとめ、担当の大学教員へ提出することが求められる。担当教員は、保育・幼児教育を専門とする教員を中心としてその他の専門性を持つ教員で構成されている。また、学期中2回大学での振り返りの時間が設けられている。そこではそれぞれの担当教員の専門性を生かした内容で行われている。1年生は前期の大学での学修を経てようやく子どもとかわる楽しさとともに保育現場での学びに手ごたえを感じている。

その一方で、保育所には出勤簿が用意され、学生は保育体験に参加すると捺印し、遅刻・欠席する場合は自らが園と大学の担当教員に事前連絡を入れること、また学期終わりには保育所へ半期のまとめレポートを提出することが課せられている。保育所は保育体験における態度や姿勢、レポート等で評価を行う。こうした社会人としての基本的な態度、つまり時間や期限を守る、相手に伝わるようにていねいに記録を書く、あいさつをするなどといった保育者基礎力・態度は現場から養成段階で学生に身につけてほしい事柄としてあげられている（表1）<sup>9)</sup>。本学に限らず他校のさまざまな体験的実習のなかにこうした学生指導の要素も含まれている。

本学は附属園や併設園を持たないが、幸い調布市内の大学近隣の保育所と連携した保育体験を実施することができている。また、他校ではボランティアや地域貢献活動として体験的実習・活動が行われている場合、体験的活動の規模から学生全員が参加できない場合もあるが、本学では履修者全員が授業のなかで保育体験を行

表1. 幼稚園教諭および保育所保育士がもつ保育者基礎力の獲得時期に対する意識

養成校が中心となって育てていく事項 (9割の保育者がもつ意識)	養成校で土台をつくり保育現場で学びながら 育てていく事項 (7割の保育者がもつ意識)
時間や期限を守ることができる	常に適切な判断力をもつことができる
ていねいにきれいな字を書くことができる	子どもや他者に対して寛容さをもって接することができる
常に身だしなみは清潔感があるように心がけることができる	相手を理解し円滑に物事を進めることができる
言葉遣いやマナーに配慮して行動することができる	相手の持つ力を信じ、頼ることができる

(一般社団法人全国保育士養成協議会 (2014) 専門委員会課題研究報告「保育者の専門性についての調査」—養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み (第2報)—, pp.38-40. より筆者作成)

うことができている。そして、実習の核となる保育・幼児教育の専門教員が中心となり、その他の教員と授業展開がされていることでも学内連携がなされているといえよう。一方、実習に繋がるような連続性・段階性については具体的に検討する必要があると思われる。例えば、振り返りのレポートから実習記録につなげていくことや、保育所だけの体験にとどまらず幼稚園や各種施設での体験が可能となるような、また子どもたちの一日の生活や保育者の一日の職務の流れをも知る機会となるような検討も必要であろう。そのためには、一日保育体験を実施するための時間割をどのように確保するかということも計画的に考えていかなければならないだろう。

### 現場との連携による保育者養成の可能性と課題

これまで、ますます多岐にわたる課題を持つ日本の保育現場のなかにあって、時代の求めに応える保育者を養成するために、我が国の保育者養成の課題も鑑みながら本学の体験的実習と位置付けられる保育体験について他校の取り組みもあげながら見てきたが、今後のあり方についてさらなる可能性と課題について整理したい。

実習事後指導において、学生が保育者としての進路を考え直すということが時々みられる。実習先は必ずしもそれぞれの学生に合った所とはならず、また評価の仕方も実習生ということで今後の育ちに期待して辛めに評価をする園と、逆にまだ学びの途上にある実習生という見方から比較的寛容な評価をする園と様々である。しかし、学生にとっては養成校に在学する間数園でしか実習を経験することができず、そのたまたま実習先となった園評価で将来を決めようとするのが起きてくる。実習生を引き受ける側としては、後輩となる保育者を育てるという使命のもと責任感を持って指導にあたったださるが、現場としてはまずは子どもたちの保育はもちろんのこと、他様々な業務に追われ非常に多忙であること、また専門的な実習教育の担い手はおらずそれぞれの保育者の経験による指導となり、偏りがあることも考えられる。その意味において、養成校がどのような園を実習先・体験先と選ぶかは、実は大きな問題であると思われる。実習先が就職先となる場合もあることから、養成校がどのような保育者を養成したいのかを明確にしていく必要があるだろう。現場での経験が楽しいものでなければ、大学での学びと繋がるものでなければ、学生は就職しようとは思わないであろう。

また、本学は地域との連携がとれていることで保育体験を実施することが可能となっている。そうであるならば、現場だけに学生の現場体験を依頼するのではなく、大学教員として地域の保育者の成長に貢献することも考えていくことも大切ではないだろうか。具体的には保育者向けの研修や、コーディネート的な部分での貢献、また子育て支援活動を模索することが可能であろう。前出の保育者の専門性の成長プロセスにあるように、養成段階にある学生から特に離職率の高い1, 2年目の保育者を現場とともに育てていくシステムの構築を考えていければと思う。

## 引用文献

- 1) 日本子ども家庭総合研究所 (2015) 日本子ども資料年鑑, p46.
- 2) 厚生労働省 (2014) 国民生活基礎調査 I 世帯数と世帯人員数の状況  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/dl/02.pdf> p6.
- 3) 厚生労働省 (2017) 一般職業紹介状況 (職業安定業務統計) (職業安定局) 一般社団法人全国保育士養成協議会現代保育研究所研修資料 保育行政の動向と課題について p.23.
- 4) 厚生労働省 (2009) 平成21年度保育士の需給等に関する調査研究報告書
- 5) 劉 郷英 (2013) 中国における乳幼児教育・保育の動向と保育者養成改革の現状と課題に関する検討, 福山市立大学教育学部研究紀要, vol.1, pp.142-144.
- 6) 松井由佳, 瓜生淑子 (2010) ニュージーランドにおける乳幼児保育制度一幼保一元化のもとでの現状とそこからの示唆一, 奈良教育大学紀要, 第59巻, 第1号 (人文・社会), p.62.
- 7) 一般社団法人全国保育士養成協議会 (2015) 専門委員会課題研究報告書「学生の自己成長感を保障する保育実習指導のあり方一保育実習指導 I・II・IIIを中心に一, p.71.
- 8) 一般社団法人全国保育士養成協議会 (2015) 専門委員会課題研究報告書「学生の自己成長感を保障する保育実習指導のあり方II一ヒアリング調査からの検討一, pp.9-11.
- 9) 一般社団法人全国保育士養成協議会 (2014) 専門委員会課題研究報告「保育者の専門性についての調査」一養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み (第2報)一, pp.38-40.

## 【英文要旨】

Early childhood education and care (ECEC) has been a hot topic in Japan. And educational system for early childhood teacher also has been a hot topic because of some problems. For example, practical and educational period on field work is too short, new early childhood teachers are in a tendency to quit their jobs in a several years, expectation for students from early childhood teacher and caretaker become higher, and so on. Therefore, experimental and activities need to be recognized and implemented more in curriculums of early childhood teacher.